

交際中の暴力を防ぐための学校ベースのプログラムは行動に変化を与えない



恋人からの暴力
(dating violence) に対する、
若者の知識や心構えを向上させる

このレビューの目的は何か

このキャンベルシステムティックレビューは親密な関係性において生じる暴力を減らしたり未然防止したりするために行われる学校ベースの介入の効果について検証するものである。このレビューは態度や信念を変更させ、被害者や加害者を減らし、行動を変容させることを目的としたプログラムに焦点を当てている。このシステムティックレビューは、23の研究を含んでいる。

交際関係において生じる暴力を防ぐために学校で行われるプログラムは、暴力についての知識や、関係性において生じる暴力を受け入れないような態度、問題を解決する際の適切な態度の自覚を向上させる。しかし、それらが行動の変容に対して持つ影響はごく僅かなものである。

何についてのレビューか？

親密な関係性にある若者のおおよそ3-10%に問題が発生する。心理的、あるいは身体的、性的な暴力が親密な関係性において生じることは、若者の心理ならびに身体の健康に対して大きな影響を持つ。親密な関係性において生じる暴力は長期にわたって影響をもたらす。それは例えば、抑うつ状態や摂食障害、薬物乱用などであり、さらに、学校でのパフォーマンスにも影響する。

このレビューは中学校ならびに高等学校において実施された親密な関係性において生じる暴力を防止するためのプログラムについてのエビデンスを要約したものである。

含まれている研究は何か？

10代の若者の親密な関係性において生じる交際中の暴力や性的暴力を減少させたり、予防したりするために学校で行われた介入についての研究のみが含まれている。研究の中には、以前から発展してきているプログラム、例えばLove U2やSafe Dates、Connections: Relationship and Marriageなどのようなプログラムを扱ったものもある。他の研究は、補助的なプログラムや最近発展してきたプログラムを用いている。

このレビューに含まれるための条件として、こうしたプログラムは介入が持つ影響について次のうち一つ以上を測定している必要があった。すなわち、(a) 交際関係において生じる暴力についての知識、(b) 交際関係において生じる暴力についての態度、(c) レイプ神話の受容、(d) 交際関係において生じる暴力についての加害性、(e) 交際関係において生じる暴力についての被害性、(f) 親密なパートナーとの関係において健全なふるまいはいかなるものか、非健全なふるまいはいかなるものかを認識する能力、である。



この研究がいかに最新のものか？

調査研究は2013年7月に完了した。このキャンベルシステマティックレビューは2014年5月28日に出版された。

キャンベルコラボレーションとは何か？

キャンベルコラボレーションとは、国際的であり、自発的であり、非営利の研究ネットワークで、システマティックレビューを出版している。我々は社会科学や行動科学のプログラムのエビデンスについて要約し、その質を評価している。我々の目的は、人々がよりよい選択をすること、よりより政治的決断をすることを助けることである。

この要約について

この要約はSimon Goudie(キャンベルコラボレーション)によって書かれている。このPLSは2014年7月のキャンベルシステマティックレビュー「親密な関係性における暴力や性的暴力を減らすための学校ベースの介入」(Lisa De La Rue, Joshua R. Polanin, Dorothy L.Espelage, Terri D. Pigot)に基づく(DOI: 10.4073/csr.2014.7)AnneMellbye (RBUP、ノルウェー)がこの要約をデザインし、Tanya Kristiansen (キャンベルコラボレーション)によって編集・プロデュースされた。

厳密に定義された統制群を持った研究のみが含まれている。

このシステマティックレビューは、23の研究のデータを要約しており、うち14はバイアスのリスクが高いと評価された。これら含まれる研究は、アメリカ合衆国やカナダにおいて実施されたものである。

学校ベースのプログラムはいかに有効であるか？

未然防止のためのプログラムは、交際関係において生じる暴力についての若者の知識と態度を改善させる。これらの効果はフォローアップにおいても維持される。介入群の学生たちは交際関係において生じる暴力に関する知識についての中程度の向上、ステレオタイプ的な「レイプ神話」に対しての受容度の低下、人間関係において生じる対立を解決することについての中程度の向上が見られた。

学校ベースのプログラムが加害者と被害者の量にいかなる影響を与えるかについて検証した研究の数は限られていた。これらの研究は、予防プログラムが、行動にはごく小さな影響しか持たないことを示唆した。

このレビューは政策立案者や意思決定者にいかなる示唆を与えるか？

人間関係において生じる暴力を未然防止するためのプログラムは重要である。なぜならば、暴力は青少年が健やかであることに対して強い影響を持ち、長期間にわたって影響を持つリスクもあるからだ。既存のプログラムはより行動の変容を促すようにデザインされるべきである。対人関係においてのスキルを生徒同士の中ではなくむ要素がこの目的達成に役立つであろう。

このレビューは研究に対していかなる示唆を与えるか？

未然防止のために尽力するには、態度と行動の双方を変えることが必要である。今後の研究においては、単なる知識や態度に留まるのではなく、より一層実際の行動について測定することに焦点が置かれる必要がある。また、プログラムも文脈として若者の社会的な、行動面における成長に対して機能する社会的要素、例えば仲間集団の影響などについて熟考する必要がある。

ここに含まれた研究の全ては北アメリカにおけるものであった。他の地域における研究も必要である。